

収奪(expropriation)と搾取(exploitation)について

「収奪」と「搾取」はほぼ同義に用いられることがあるが、ここでその規定を経済学の観点から明確にしておこう。

まず、両者の定義である。

収奪とは、経済外的強制（権力）による利得をさす。

ex. 古代の奴隸労働、封建制の身分制を前提とした地代や税

搾取とは、経済的強制（市場原理）による利得をさす。

ex. 商品経済での自由の外觀をまとった剩余価値（利潤）

収奪は誰の目にも見えやすいが、搾取はそうではない。そこで以下、搾取のメカニズムを示したい。

搾取のメカニズム

資本主義経済においては、商品の売買は、自由であり、それが満たされてる限り合法そのものである。そこで、一般の商品と労働力商品の異同を比較しつつ、その合法性に潜む構造を解明しよう。

1. 一般の商品と労働力商品の異同

一般の商品に価値と使用価値とがあるように、労働力商品にもそれに相当するモノがある。価値に対応するモノを労賃といい、使用価値に対応するモノを労働という。

	交換の側面	利用の側面
一般の商品の二要因	価値	使用価値
労働力商品の二要因	労賃（賃金）	労働

2. 一般の商品と労働力商品との売買とその利用

- 一般の商品は価値を基準とした価格で売買され、それを購入した者はそれを自由に利用できる。つまり、使用価値を享受できる。
- 労働力商品の価値を労賃といい、労働力商品はその価格で売買され、それを購入した者（雇用者、企業、資本家）はそれを自由に利用できる。つまり、労働を行わせることができる。そしてその結果・果実は当然にも労働力商品を購入した者の所有となる。

3. 二つの商品の交換の側面

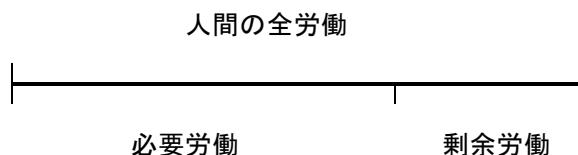
- 価値…価値の大きさは商品の（再）生産費で決まる。
- 労賃…労働力商品の価値である労賃は労働力商品の（再）生産費、すなわち生活費で決まる。
つまり、価値と労賃には同じ論理が働く。

4. 二つの商品の利用の側面

- 使用価値…商品を消費すること。
- 労働…労働力商品の消費、すなわち他のモノを生産すること。つまり、労働とは新たな商品を生産することだ。もっとも、この商品はまた価値と使用価値とを持つ。
つまり、使用価値と労働には、同じ論理が働く。

5. 人間労働の特質

人間は、たとえば1日（1ヶ月）労働すると、1日（1ヶ月）の生活に必要な生活資糧より多くのモノを生産する能力を有する。生活資糧を満たす労働を**必要労働**、それ以上の労働を**剩余労働**という¹。人間の全労働には超歴史的に必要労働と剩余労働が含まれている。



6. 労働力商品の価値と、労働によって生産された商品の価値

その生活費で決まる労賃、つまり労働力商品の価値【価値ⓧ】と新たに生産された商品の価値【価値⓫】を比べると、価値ⓧより価値⓫の方が大きい。

というのは、価値ⓧは必要労働によってもたらされたものであり、価値⓫は必要労働と剩余労働によってもたらされたものであるからだ。なお、剩余労働によって生産された価値を**剩余価値**という。

労働次元	必要労働	剩余労働
人間の全労働		
価値次元	労賃（労働力商品の価値）【価値ⓧ】	剩余価値
新たに生産された商品の価値【価値⓫】		

つまり、労働力商品の売り手（労働者）は、自ら生産した商品の価値の一部分のみを労賃として受け取るのであって、残りの部分（剩余価値）は労働力商品の買い手（雇用者、企業、資本家）のモノとなる。そして、この剩余価値が利潤の源泉となる。

7. 結論

一般商品の売買と利用の論理を、労働力商品に当てはめると以上のようになる。一般商品の売買と利用が何ら違法でないならば、労働力商品のそれも違法ではない²。つまり、商品経済においては、何ら経済外的強制によることなく、雇用者や企業は剩余価値を獲得することができるのであって、これを**搾取**という。搾取とは、このように、自由の外觀をとった経済的強制のみによってもたらされるものである。

近代社会すなわち資本主義（市場経済）では、かつて（古代や中世）のような収奪は明示的には存在しないが、搾取は厳然として存在しているのである。したがって、これを廃絶するとしたら、抽象的に言えば、労働力の商品化を止揚する以外にはない。

*1 必要労働や剩余労働は社会的に決まる概念である。歴史的には、剩余の必要化はしばしば見られる。

*2 ホジスキン（T.Hodgskin）などの主張する「労働全収益権」は、この意味で根拠を失うことになる。